



それって指導力より恫喝力では？

「恫喝力」とは耳慣れない言葉ですが、関西国際大学教授、百瀬和夫先生は、指導力との違いを、事例を通して指摘しています。なかなか考えさせられる内容ですので紹介します。

体育の授業の後、小学1年生のFさんは、上履きをきれいにし始めて、次の算数が始まっているのに教室に入ろうとしません。支援員がいろいろ話しかけて何とか教室に戻そうとしても動かずに困っているところに、担任の先生がつかつかとやってきて、「何してんの！早く入りなさい！」と一喝。するとFさんはスッと教室に戻ったのでした。



さて、あなたは「さすが担任、指導力抜群！」と思いますか？ 百瀬先生によると、これは『指導力』ではなく『恫喝力』だと言います。

…… 子どもが何をしているのか、何をしようとしているのかを確かめもせず、一喝して言うことをきかせて、教室に戻ったとしても成長はありません。先生が怖いから従っただけで、子どもが主体的には動いていないからです。このやり方を低学年から続けてしまうから、高学年での指導不服従の要因の一つになるのです。……

では、どう指導するか。百瀬先生は次のように言います。

…… 子どもが何をしようとしているのかが分かったら、腕時計などを見せながら「長い針が5のところに来るまでに教室に戻れるかな？」とか「長い針がどこにくるまでに終われそう？」と問いかけ、子どもが自分で「〇〇までに戻るよ」と決めるようにする。

子どもが決めたら、「じゃあ、先生教室で待ってるよ！（笑顔で）」と信じて任せ、もしうまく戻ってきたら「〇さん凄いね！先生、超嬉しいわ～！」と褒めたり共感したりする。約束通りに戻って来なければ、そのときは残念ながら、またやり直し！ 『指導』とは、目標を決めてそこのまで一緒に寄り添って導いていく行為のこと。手間暇がかかるのです。……

子どもが自分で決めた主体的な良い行動に注目することによって、教師に脅かされて行動するのではなく、**自分で主体的に考えて行動できるように育む**ということです。

かつては、「やたら厳しく、怖い先生」として皆から恐れられる先生の存在があり、教室内や、時には廊下中を叱責の怒号が響き渡ることもありました。今では影を潜めました。

それでも教室という密室空間で、担任がいわば『**静かな恫喝力**』をもって子どもをコントロールし、皆が『**妙にお利口な学級**』も一部見られます。特に小学校低学年は、はっきりとした自我意識が芽生える前の従順な時期であるため、「先生が怖い」「私も叱られたらどうしよう」との思いが強いと、情緒不安定や登校渋りに繋がりがやすく、注意が必要です。

かすたネットがかかわる子は、この限りでないことが多いため、手をこまねてしまう場合もあるようです。

「きちんとさせたい」との思いが過剰に強いと、恫喝力に依存した指導に陥りやすく、これが通用しやすい低学年しか担任できない教師になりかねない（中・高学年や中学生を担当すると学級が荒れてしまう）…この落とし穴には足をすくわれないようにしたいものです。

【引用資料】

関西国際大学教育学部 教育福祉学科ニュース
2021.6.29 大学HPより閲覧できます。

担当 学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL 639-4392